

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 28 年 6 月 3 日現在

機関番号：32661

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2014～2015

課題番号：26893285

研究課題名(和文) 外来化学療法を受ける再発がん患者の多重症状の緩和に向けたプログラム開発の予備研究

研究課題名(英文) Preliminary study for the development of a program to alleviate multiple symptoms in recurrent cancer outpatients receiving chemotherapy

研究代表者

浅海 くるみ (ASAUMI, Kurumi)

東邦大学・看護学部・助教

研究者番号：90735367

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,100,000円

研究成果の概要(和文)：外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状の主観的体験や対処の実態、QOLへの影響を明らかにするため、20名の対象者に個別面接および質問紙調査を実施した。結果、対象者の日常および社会生活に影響を与える多重症状の特徴が明らかとなった($p < 0.05$)。また、対象者は、既に出現している症状が悪化しないよう、生活動作の工夫など積極的に対処する実態が明らかになった一方、今後起こり得る症状への予防に向けた対処は困難な実態も推察された。今後は、生活に影響を与える多重症状に焦点を当てた患者のセルフケア指導に加え、患者自身が、多重症状の変化を捉え、自ら適切に対処、予防することを支援する看護介入が必要と考えた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of the study was to identify the subjective experiences of outpatients with recurrent breast cancer who were receiving chemotherapy and coping with multiple symptoms in order to measure the impact of these symptoms on the QOL. We quantitatively and qualitatively analyzed the data of 20 participants using two questionnaires and semi-structured interviews, respectively. Multiple symptoms had significant negative effects on the patients' daily and social lives ($p < 0.05$). Otherwise, patients coped with multiple symptoms to prevent their condition from worsening. However, it appeared difficult for patients to predict and prevent symptoms that might occur. Therefore, nursing program focused on improving patient self-care skills to manage multiple symptoms that negatively impact QOL should be established. Moreover, it is necessary to provide support to patients for identifying multiple symptoms, as well as preventing the occurrence of additional symptoms in their daily lives.

研究分野：がん看護学

キーワード：転移再発乳がん 外来化学療法 多重症状

1. 研究開始当初の背景

我が国の乳がん罹患率は、増加の一途を辿っており、2003年には女性癌部位別罹患数で最多となった。一方で、近年、分子標的治療薬などの新規抗がん剤の開発により、転移や再発を来した乳がん患者への治療効果は著しく改善し、予後は飛躍的に延びたが、同時に、患者の闘病期間も延長している。

また、手術不適合の再発乳がんへの抗がん剤治療の目的は、根治ではなく、延命や Quality of life (QOL) の改善であるため、治療・療養環境は、初発乳がんに比べて、精神的に過酷であることが考えられる。実際、再発乳がん患者は、鬱や不安などの精神疾患の有病率が高いと報告されている (Okamura, 2005)。さらに、抗がん剤治療を受ける再発乳がん患者の身体症状は、疼痛や浮腫など、がんの進行に起因した症状に加え、抗がん剤による悪心・嘔吐、末梢神経障害など様々な副作用症状が同時多発的に発生することで、多重の身体的苦痛に苛まれている。このように、3つ以上の症状が同時多発的に発生すると、単独で生じる場合よりも、活動量低下など日常生活行動への影響が強く、QOL の低下が示されている (Dodd, 2001)。

乳がん患者の多重症状に関する国内外の研究を概観すると、補助化学療法を受ける患者を対象とした研究が散見された。具体的には、疼痛・倦怠感・不眠症・抑うつ症状が同時多発的に起こることによる身体機能への負の影響 (Dodd, 2010)、高齢乳がん患者の多重症状による QOL への低下 (Roiland, 2011) など、QOL や心理社会的な影響を検討した研究が多く、化学療法中の再発乳がん患者の多重症状の主観的体験や対処の実態を明らかにした研究は無かった。しかし、外来通院で化学療法を継続する患者は、療養の主体が自宅となることで、多重症状に個別で向き合い、症状の重篤化に向けて対処しなければならない状況に置かれることから、彼らの実状を捉えたうえで、QOL 維持に向けた看護支援を確立することは重要である。したがって、そのような看護支援を検討するためには、彼らの多重症状に対する主観的体験と対処の実態および QOL への影響を明らかにする必要があると考える。

そこで、本研究により、外来化学療法中の転移再発乳がん患者の多重症状の主観的体験と対処の実態、および QOL への影響を明らかにすることにより、外来での看護支援プログラムを作成するための基礎資料を得るという着想に至った。

2. 研究の目的

外来化学療法中の再発乳がん患者の多重症状の主観的体験と対処の実態、および QOL への影響を明らかにすることを目的

とした。

3. 研究の方法

1) 研究デザイン

Mixed Methods

2) 調査実施期間

平成 27 年 4 月～平成 28 年 2 月

3) 研究対象者およびリクルート方法

研究対象者は、研究協力の得られた施設で外来化学療法を受ける再発乳がん患者であり、以下の要件を満たす者とした。(1) 成人女性 (2) 疾患名、病状の告知、治療目的についての説明がなされている (3) 転移や再発の告知を受けてから 3 ヶ月を過ぎている者 (4) 言語的コミュニケーションがとれる (5) 調査による身体的・心理的負担が認容できると主治医が判断した者。

研究対象者のリクルート方法は、研究の概要と参加の依頼、申請者の連絡先を明示したポスターを調査実施施設の乳腺外科外来の診察室内と待合室に掲示し、研究参加を希望する対象者が自由意思に基づいて参加できるように配慮した。ポスターには、申請者の連絡先を付記し、研究協力の希望者が申請者へ連絡を入れていただく依頼文を明示した。

4) 調査内容および調査方法

(1) 調査内容

診療録調査

対象者の基礎情報 (年齢、性別、家族歴、職業、病歴、病状、治療方針、治療内容、治療状況) は、診療録や看護記録より得た。

個別面接調査

外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状の主観的体験と対処の実態が明らかになるよう、「現在、どのような複数の身体症状が生じているか」「それらの身体症状は、どのような生活にどのように影響を与えているか」「それらの身体症状にどのように対処しているか」ということについて、インタビューガイドに基づき個別面接調査を実施した。なお、対象者の同意を得て、面接の内容を録音した。

質問紙調査

外来化学療法を受ける再発乳がん患者の多重症状および QOL への影響を客観的に評価するため、2 種類の自記式質問紙調査を実施した。

() 日本版 M.D.Anderson Symptom Inventory (以下、MDASI-J): 「症状の深刻さを示すスコア (症状スコア)」13 項目、「症状による生活への支障を示すスコア (生活の支障スコア)」6 項目で構成される。

() 日本版 Functional Assessment of Cancer Therapy-Breast (以下、FACT-B): 「身体的 QOL」7 項目、「社会的 QOL」7 項目、「精神的 QOL」6 項目、「活動的 QOL」7 項目、「乳がん関連 QOL」10 項目の下位尺度

から構成される。

(2) 調査方法

研究調査への協力を申し出た対象者に対し、申請者が、調査日時や場所を対象者の希望に沿って決定した。また、調査前に、対象者の同意を得た上で、診療録調査を実施した。個別面接調査および質問紙調査は、医師の診察や抗がん剤投与までの待ち時間に、プライバシーの保てる個室にて、申請者が実施した。調査回数は、質問紙調査は、初回の調査日に1回実施し、個別面接調査は、初回の調査日と次のクールの開始日(3~4週間後)の合計2回実施した。

5) 分析方法

(1) 質的分析

面接の内容を逐語録とし、対象者の多重症状の主観的体験および対処の実態が表れている部分を意味内容ごとに区切り、意味単位を定め、簡潔な表現に変換した。

意味単位は、“多重症状の主観的体験”および“多重症状への対処”へと分けた。そして、それぞれの意味単位を、内容の類似性に沿って、分類整理し、各まとまりを簡潔な一文で表現し、“コード”を定めた。

コードの共通性を検討し、<サブカテゴリ>を導き、【カテゴリ】へ統合した。

(2) 統計解析

診療録調査および質問紙調査で得たデータの記述統計を求めた。さらに、多重症状を識別するため、MDASI-Jの「症状スコア」の主成分分析を実施した。また、各症状とQOLとの関係を明らかにするため、MDASI-Jの各症状とFACT-Bの下位尺度のピアソンの積率相関係数を算出した。有意水準は5%とし、統計解析には、IBM SPSS ver22.0、AMOS ver22.0を用いた。

6) 倫理的配慮

本研究は、申請者の所属施設および調査実施施設における倫理審査委員会で承認を受け、実施した。申請者が、研究協力の希望を意思表示された対象者に対し、「研究の背景・目的・方法・データ保管方法・予測される結果(利益・不利益)・研究協力の任意性と撤回の自由・個人情報保護」等について、説明文書および口頭で説明し、同意書に署名いただいた。また、調査は、対象者の希望する日時およびプライバシーの確保できる場所で行い、対象者の心身に負担がかからないよう十分に配慮した。

4. 研究成果

1) 対象者の概要

対象者は20名であり、平均年齢58.3(±14.2)歳であった。抗がん剤の投与期間は、調査時に1次治療を受けている者が7名(35%)であった。投与中の抗がん剤の種類は、パクリタキセルを投与しているものは9名(45%)であり、ペバシツマブやジェムザール、ハー

セプチン等と併用していた。その他、ハラヴェン®、アフィニートル、カドサイラ®を投与しているものがいた。また、7名は職業に就いており、13名は同居家族があった。

2) 個別面接調査の結果

総面接時間は、591分49秒であった。分析の結果、“多重症状の主観的体験”の意味単位88、<コード>19、サブカテゴリ6、【カテゴリ】3が抽出され、“多重症状への対処”の意味単位80、<コード>22、サブカテゴリ9、【カテゴリ】4が導かれた。

(1) 多重症状の主観的体験

対象者は、痺れや浮腫などの機能障害に消化器症状や倦怠感が加わると、日常生活行動が著しく阻害されること、がんや治療に関連した疼痛、脱毛・皮膚障害などの外見の変化に戸惑い、社会生活が脅かされる体験をしていることが明らかとなった。

(2) 多重症状への対処

対象者は、多重症状を悪化させない生活動作を取り入れること、種々の症状の変化を記録して薬物を効果的に使うこと、これまでの治療による外見の変化を隠すこと、抗がん剤による身体のダメージを緩和するなどの対処をとっていることが明らかとなった。一方で、患者は目の前の症状の対処に追われることで、今後起こり得る症状への予防に目を向けることが困難な様子が語られた。

3) 質問紙調査の結果

(1) 症状の深刻さ、症状による生活への支障

MDASI-Jの「症状スコア」の平均値(SD)は、上位順から、しびれ3.2(2.8)、だるさ3.0(3.2)、息切れ3.0(3.1)であった。MDASI-Jの「生活への支障スコア」の平均値(SD)は、上位順から、仕事(家事含む)3.5(3.6)、歩くこと3.3(3.2)、生活全般2.7(3.2)であった。

また、「症状スコア」の主成分分析では、主成分は、固有値が1以上となる成分まで求めた。各主成分の寄与率は、第1主成分は、59.7%、第2主成分は、15.5%、第3主成分は、8.4%であり、累積寄与率は83.7%であった。第1主成分の主要な変数は、痛み・だるさ・息切れ・消化器・精神症状であり、この成分は全体の59%を反映した。第2主成分の主要な変数は、しびれ・物忘れ、第3主成分の主要な変数は、眠気であった。

(2) 症状によるQOLへの影響

MDASI-Jの「症状スコア」とFACT-Bの合計点および下位尺度の得点とのピアソンの積率相関係数を算出した。合計のQOLは、「食欲不振」「嘔吐」「息切れ」「悲しい気持ち」と強い負の相関($r = -0.61 \sim -0.62$)があった。また、身体的QOLは、「痛み」「だるさ」「息切れ」「食欲不振」「悲しい気持ち」と強い負の相関($r = -0.51 \sim -0.60$)、精神的QOLは、「食欲不振」「嘔吐」とかなり強い負の相関($r = -0.71 \sim -0.74$)、乳がん関連QOLは、「悲しい気持ち」「ストレス」と強

い負の相関 ($r = -0.46 \sim -0.49$) があった。

本研究の結果より、対象者は、痺れ・浮腫・息切れなどの機能障害に、食欲不振や嘔吐などの消化器症状が加わることで、日常生活動作に支障を来し、身体的・精神的 QOL に影響を与えること、脱毛や皮膚障害などの外見的变化が同時に出現すると、社会生活を脅かされることが推察された。また、対象者は、日常の生活動作を工夫することや、症状の変化を記録するなど、出現した症状に対して積極的に対処していることも明らかになった一方、今後起こり得る症状への予防に目を向け、行動することが困難な状況であることも推察された。

このことから、外来看護師による患者への個別のセルフケア指導に加えて、患者自身が、多重症状の変化を捉え、日常生活のなかで、適切に対処・予防することを支援する看護介入が必要であると考えた。

【引用文献】

Okamura H, Watanabe T, Narahashi M et al (2000). Psychological distress following first recurrence of disease in patients with breast cancer: Prevalence and risk factors, Breast Cancer Research and Treatment, 61, 131-137

Dodd MJ, Miaskowski C, Paul SM (2001). Symptom clusters and their effect on the functional status of patients with cancer, Oncology Nursing Forum, 28, 465-470

Dodd MJ, Cho MH, Cooper BA et al (2010). The effect of symptom clusters on functional status and quality of life in women with breast cancer, European Journal of Oncology Nursing, 14(2), 101-110

Roiland RA, Heidrich SM (2011). Symptom Clusters and Quality of Life in Older Breast Cancer Survivors, Oncology nursing forum, 38(6), 672-680

5 . 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計0件)

〔学会発表〕(計1件)

Kurumi Asaumi, Yoshie Murakami、Impact on multiple symptoms on the quality of life of outpatients with recurrent breast cancer receiving chemotherapy、The 19th East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS)、2016年3月14日、幕張メッセ国際会議場

(千葉県千葉市)

〔図書〕(計0件)

〔産業財産権〕
出願状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

取得状況(計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6 . 研究組織

(1)研究代表者

浅海 くるみ (ASAUMI, Kurumi)
東邦大学・看護学部・助教
研究者番号：90735367